
俺と2人の文月ライフ

朝露

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と2人の文月ライフ

【Nコード】

N0914P

【作者名】

朝露

【あらすじ】

吉井明久の幼馴染、湊と夏澄。原作には登場しないはずの2人の介入によって、この作品はどこまで原作とかけ離れて行くのか！それは誰にも分からない！！（作者にも）。オリキャラ・湊視点で送る、IFの物語

プロローグ

俺がアイツら2人と出会ったのは5歳のときだった。母親たちの仲がよかったらしい。その血をひくためか、俺たちもすぐに仲良くなつた。家が近かったため、小学校、中学校も同じでしかも9年間クラスも同じで。だからいつもつるんでた。周囲の目から見たら、さぞ奇妙に見えただろう。3人組のうちの1人は女子だったから。中学生になっても変わらなくて、まあ俺とアイツが付き合い始めたつてのもあるけど。

ただ、高校まで同じになるとは考えてなかった。さすがに高校までは同じにならないだろうとみんな思ってた。だから、みんなびっくりしてた。

でもまあ、俺は普通に学校生活が送ればいいんだ。学力的に心配だけど・・・

俺たちでさ、すっげえ楽しくしようぜ。俺たち3人で掛かれれば出来ないことなんてない！

そうだろう？ 明久、夏澄。

ブログ（後書き）

短いです。ごめんなさい！何番煎じか分かりませんが、よろしかったらご覧お願いします！！

試召戦争編 第1問

今世間で最も注目を集める新設校・文月学園。“試験召喚システム”という新技術を試験採用している進学校で、俺たちの通う学校でもある。その校門へと俺たちは猛ダッシュで向かっていた。もちろんその理由は、寝坊である。

「おい！はやくっ！」

「寝坊したの、ミナだろっ！夏澄、大丈夫？」

「だ、大丈夫です！あっ、あれ」

「どうしたっ」

んだ！と、続けようとしたセリフを遮るように、朝っぱらからよく響く怒号が聞こえてきた。

「遅いぞ、お前ら！」

「あっ、おはようございます。西村先生」

「おはようございます。先生」

「おはようございます。せっ・鉄人先生」

「その名で呼ぶな！しかも、なんで言い直した！」

校門に立っていたのは、生活指導・西村教諭。人間離れた肉体を持つ通称・“鉄人”。

「それよりも、言うことがあるんじゃないか？」

「遅れてすみませんでした」

「ええっと、今日も肌が黒いですね」

「朝から声がよく響きますね。やっぱり、腹筋が大事なんですか？」

「お前らは遅刻の謝罪よりも、俺の肌の色や声の響きのほうが大事なのか？ まともに答えたのは東風谷だけか。・・・まあ、いい。受け取れ」

そう言って、俺たちに1つずつ茶封筒を差し出した。みんなが一斉にその中に入った紙を開くと、そこに書かれていたのは『F』。

「あれ？ ちょっとまって！？ 僕とミナはともかく、なんで夏澄がFクラスなの？」

「俺も驚いたぞ。全教科無記名は今までで初めて見たな」

「もしかして、それで落ち込んだのか？」

「家に帰ってから気づいたんです・・・」

「きちんと確かめていれば主席だったものを・・・。吉井も、あのままテストを受けてそれなりの結果を出していれば、観察処分について検討してもらおうとしていたんだぞ？」

そう、アキは熱で途中退席した姫路に付き添って保健室に行ったためFクラスになったのだ。

（もし、それを知っていても僕は・・・）

「僕は、姫路さんが苦しんでいるのをほっとくことなんて出来ませんでした」

そうキツパリと言ったアキのセリフを聞いて、俺は頬が緩んでいるのを止められなかった。アキを挟んで隣に立つ夏澄も同じように微笑んでいた。きつと同じこと考えてるんだろうな。

（（それでこそアキ（君）だな））

「だが・・・よく考えれば3人が一緒のほうが良いのかもしれないな」

「?それってどういう・・・」

「吉井と東風谷がいれば、日下部の暴走を止められるかもしれんな」
なんて鉄人が言うから、

「まさか。2人を巻き込んで騒ぎを大きくしてやりますよ」

そう言い切って、また余計なことと言われる前に2人の背中を押して校舎に向かう。

「いいの?あんなこと言って」

「大丈夫だって。それよりさ、今年1年楽しもうぜ!来年はこんな偶然無いだろうし」

「まず、ミナ君が成績を上げればいいと思います」

「夏澄の言うとおりだよ」

「分かってるって！ほら、行こうぜ」

結構ワクワクしてたんだよなあ、俺たち。・・・Fクラスを見るまでは。

設定

日下部 湊^{くさかべ みなと} C V・細谷佳正

所属 2年Fクラス

召喚獣 秀吉と同じような袴（色は藍）。武器は和弓（長さは召喚獣とほぼ同じ）

部活 弓道部

科目 得意 文系、特に古文と日本史

苦手 それ以外の教科 保健以外はほぼ壊滅

明久の幼馴染。日下部神社の神主の息子で、霊感が強いいため幽霊が見える。

髪と目の色は、黒。愛称は「ミナ」。明久や秀吉ほどではないが、中性的な顔で女装をすればそれなりに可愛い。

幼い頃から、明久と一緒に古武術・日下部流を習っているが、未だ師範代（明久は免許皆伝で、師範になっている）。

年の離れた兄がいる。

東風谷 夏澄^{こちたに かすみ} C V・悠木碧

所属 2年Fクラス

召喚獣 女神をイメージさせる白いドレス。武器はトライデント。

部活 特に入っていない

科目 得意 保健以外

苦手 保健

明久と湊の幼馴染。明久の母方の従兄妹（母親同士が姉妹。明久の母が姉）で、湊の彼女。父方の祖母がイギリス人であるためか、髪の色が薄い灰色。従兄妹なので、明久の髪の色ウィッグを付ければアキちゃんそっくりになる。

明久と湊至上主義で、2人に害を成すと思われる人物が現れたら徹底的に排除しようとする（通称・黒カスミン^{ブラック}）。
瑞希とは小学校のときからの大親友で、明久とくっついてくれればいいのと思っている。逆に、暴力的な美波は苦手。
実は、学年主席クラスなのだが全てのテストに名前を書き忘れてFクラスになる。

吉井^{よしい} 明久^{あきひさ}

召喚獣 オカルト編のデュラハンの鎧。武器はロングソード。

・原作と違う点

成績は、悪くない。総合点ならBクラスの代表になれるほどで、日本史と世界史はAクラスレベル。

湊と一緒に古武術・日下部流を習っていて、高1のときに免許皆伝で師範になっている。

第2問

校舎に入ってFクラスの教室へと向かう俺たちだったが、話題は先ほど覗いたAクラスのことだった。

「Aクラスの教室、すごかったです・・・」

「システムデスクにリクライニングシート・・・たかが高校の設備にそこまで金掛けるか？」

「でも、あんなにすごかったら勉強に真剣になるのも分かる気がするよ」

「まあ、なあ。んで、教卓つつうかスクリーン？の前に立ってたのが代表なんだろうな。ホントなら立ってたのお前だったんだろ？夏澄」

「そっか、本当なら主席だもんね。ちょっと惜しかったかな？」

「ミナ君とアキ君が一緒のほうが嬉しいです」

そんな会話をしばらく続けていたのだが、

「・・・なあ、この扉ちょっと力入れて蹴ったら壊れるんじゃない？特にアキが」

「なんで蹴らないといけないんだよ」

なんて、扉の前で躊躇してたら、夏澄がガラガラと扉を開けた。

「早く座れ！この蛆虫野郎ども！！」

「・・・テメエ、雄二・・・今誰に向かって言ったか分かってんだろうな・・・」

「ん？湊か、早く座れ・・・んな！？なんで東風谷がココにいるんだ！！」

「・・・蛆虫・・・ミナ君、私って虫以下？」

「殺す！」

「ミ、ミナ、落ち着いてよ！雄二だって知らなかったんだろうし」

「明久もいるのか！？」

雄二に殴りかかろうとした俺をアキが止める。でも俺の怒りが収まるはずもないので、

「おい、お前ら！夏澄が罵倒されたぞ！」

「」「」「坂本、テメエエエエ！！！！！！」「」「」「」

「お、おい！人の話し聞け・・・ギャアアアアアア！！！！！！！！」

「よし、席につこうぜ！」

「・・・なんかさっきよりいきいきしてない？」

そんなこと・・・当たり前だろっ!!

「相変わらずじゃのう、おぬし等も」

「ん？秀吉もこのクラスだったのか」

「そうじゃ。しかし驚いたのう。まさか明久と東風谷がFクラスとは」

「事情があつてな」

俺の目の前にいる翁言葉で喋る美少女、いや美少年は木下秀吉。ちなみに、女子生徒やアキ以外に唯一夏澄とじゃれあっているのを黙認している存在だ。

「おはよう、秀吉。ねえ、席って・・・」

「好きな所に座って良いそうじゃ」

「なら、窓際に席が空いてるからそこ行こうぜ」

座った順番は、窓際から俺、夏澄、アキだった。始めは夏澄が窓際だったが、隙間風が寒そうだったから代わった。その時のアキの温かいような目に、一瞬イラっときたのでぶっ飛ばそうかと思ったがやめた。勝てねーし。

「相変わらず夏澄に過保護よねえ。日下部って」

「げっ！島田さん!？」

「ちよっと、吉井。何よ、その“げっ!”て？」

アキの真ん前を陣取っていたのは、島田美波。去年からのクラスメイトだが、度が過ぎるほど手が出やすいようで、アキがよく被害に遭っていた。そのせいか、夏澄は少し島田が苦手らしい。

「はあ、ひどい目に遭った」

俺の前の席にFクラス男子から逃げ延びたらしい妙にボロボロな雄二が座る。

「生きてやがったか。やっぱ図太いな」

「なっ！？元はと言えば「夏澄にあんな事言ったから、だろ」うつ、
・悪かったよ・・・」

「今度は悪霊憑かせるからな。超強力なの」

「・・・ミナ君、霊能力ってそういう事につかうものじゃないです」

「・・・・・・夏澄が言うなら仕方ねえか、許す気はねえけど。」

「そーいやなんで明久と東風谷がこのクラスにいるんだ？明久はBクラス程度の学力だし、東風谷は主席だろ」

「全て無記名で出してしまったのです」

「全部か！？まさか、明久もか？」

「違うよ。僕は、」

明久がそう言いかけたところに、

「HRを始めますので、席についてください」

と、言って初老の男性教師が入ってきた。

いよいよ本格的に俺らのFクラスライフが始まるようだ。

バカテスト1 化学

問題

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると、問題が発生した。この時の問題と、マグネシウムの代わりに用いるべき合金の例を1つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点・・・マグネシウムは火にかけると、激しく酸素と反応するため危険であるという点
合金の例・・・ジュラルミン』

吉井明久の答え

『問題点・・・マグネシウムは酸化しやすく、火にかけると激しく発光して熱を出して危険
合金の例・・・ステンレス鋼』

教師のコメント

正解です。姫路さんなのですが、吉井君もよく勉強をしていますね。ただし、ステンレス鋼はそれだけでは熱伝導率が非常に悪く鍋の材料としてはあまり好ましいものではありません。気を付けましょう。

土屋康太の答え

『問題点・・・ガス代を払ってなかったこと』

教師のコメント

そこは問題ではありません。

日下部湊の答え

『合金の例・・・ミスリル銀』

教師のコメント

現実と二次元を分けて考えてください。

東風谷夏澄の答え

『合金の例・・・オリハルコン』

教師のコメント

日下部君とお付き合いをなさっているようですが、変なところで影響を受けないように。

第3問

入ってきた男性教師はFクラスの担任だったらしい（名前は福原慎だ）。HRでのやり取りでクラスの全員が改めてここが最悪の環境であることを理解した。

「それでは廊下側の人から自己紹介をお願いします」

一番廊下に近い席に座っていたのは秀吉だった。

「木下秀吉じゃ、演劇部に所属しておる。今年1年、よろしく頼むぞい」

なんか一気に空気が変わったな。まあ、ただでさえ男子と女子の比率がすごいからな。女子扱いはどうかと思うけど・・・人のこと言えないけどな。

「・・・・・・・・土屋康太」

チツ・・・やっぱりのクラスだったか。こいつが一番危険だからな。気をつけねえと。

「島田美波です。海外育ちで、日本語は出来るけど読み書きは苦手です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は・・・」

ここでチラッとアキを見て、言い放った。

「吉井明久を殴る事です」

夏澄が島田をキッ、と睨んだのが分かった。まったく、島田も懲りないな。

このあと、名前を告げるだけの自己紹介が続く。

「吉井明久です、よろしくお願いします。あと・・・」

ん？なに言うつもりだ？

「僕に暴走したミナを止めるなんて（面倒くさくて）出来ないの、夏澄は諦めて下さい」

「「「「「なっ、なにいいいい！！！！」」」」」

・・・今、なんか余計な一言が聞こえたけど分かってんじゃん。えっと、アキの次は、夏澄か。

「東風谷夏澄です、1年間お願いします」

「質問っ！」

「えっ、はい」

「何でここにいるんですか？」

聞き様によつては失礼な質問だが、しょうがないな。去年は成績トップの常連だったし。

「テストを全て、無記名で出してしまったので・・・」

「「「「「全部っ！？」」」」」

・・・分からんでも無いがな。

「それと、私はミナ君以外の男性を恋愛感情で好きになることはあ

りませんので。あと、アキ君は大事な幼馴染ですのでこの2人に危害を加えたりしたら、5倍にして返させていただきます」

・・・うっわあ、やっべ顔赤いかも。あとでアキにからかわれるっ！
おおっと、次は俺か。

「日下部湊、弓道部だ。矢は、ワザと外したとき以外に外したこと
は1度もない。それと・・・実家は神社でな。普通の人より靈感は
強いと思っている。特技は降霊術だ。・・・夏澄に手出そう
なんて考えてみる、悪霊の強い憑かせてから矢の的にしてやる。
・・・覚悟しとけ」

最後のセリフにはだいぶ力を込めた。これで言い寄ってくるバカな
んて・・・ここはFクラスだったか。

あれ？誰か足りない気が・・・

「あの、遅れてすみません・・・」

ああ、姫路がいたのか。

バカテスト2 国語

問題

以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 『(1) 得意なことでも失敗してしまうこと』
『(2) 悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え』

姫路瑞希の答え

- 『(1) 弘法も筆の誤り』
『(2) 泣きっ面に蜂』

東風谷夏澄の答え

- 『(1) 河童の川流れ』
『(2) 踏んだり蹴ったり』

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『サルも木から落ちる』、(2)なら『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

- 『(1) 弘法の川流れ』

教師のコメント

シュールな光景ですね。

日下部湊の答え

- 『(2) 弱らせて祟る(夏澄に手を出した愚か者共を)』

教師のコメント

問題の答えとしては惜しいです。ですが、人間性としては間違いです。

吉井明久の答え

『(2) 泣きつ面蹴ったり(主に雄二が)』

教師のコメント

友人をそのように譬^{たと}えるのは止めましょう・・・と言いたいところなのですが、そんな様子が頭の中に浮かんでしまうのは何故でしょうか。

第4問

俺の自己紹介の後、扉を開けて入ってきたのは姫路瑞希。振り分け試験のときにアキが連れ添って保健室に行き、Fクラスになった女子生徒だ。アキはちっとも気にしないがな。

とにかく、姫路が入ってきたFクラスはにわか騒がしくなった。そりゃそうだろう。俺だって理由を知らなきゃみんなみたいに驚いたことに違いない。

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんをお願いします」

と、クラス内でも数少ない平然とした態度をしていた担任が話しかけた。

「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします！」

そうあいさつすると、姫路は空いていた席に座った。俺の3つ隣の席、アキの隣の席だ。本人は気づいてないと思うけど。アキも若干嬉しそうだ。後でからかってやろうか。

「はいっ！姫路さんに質問です！」

自己紹介を終えた男子生徒の1人が高々と右手を挙げる（女子生徒は夏澄と島田しかいなかったのだが）。

「あっ、は、はいっ。なんですか？」

突然質問が自分に向けられて驚く姫路。

「なんでここにいらっしゃるんですか？」

夏澄にした質問を姫路にもする。察しろとは言わないが、なかなか失礼なんじゃないのか？まあ、姫路がFクラスにいるなんて誰も思わないだろうが。毎回のテストで上位一桁に常にいるからAクラスにいますとおもっているだろう。

「その……振り分け試験の最中、高熱をだしてしまいました……」

その言葉を聴き、クラス中が納得したように頷いた。試験を途中退席すると0点扱いになる。彼女は昨年度に行われた振り分け試験を途中で退席してしまったため、Fクラスになったというわけだ。

姫路の言い分を聴くと、クラス内でもちらほらと言いつの聲が上がる。

『そう言えば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ。科学だろ？アレは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとう』

これは……さすがはFクラス。予想以上のバカばかりだ。アキと夏澄の顔も苦笑いになっている。

緊張のためか、卓袱台に突っ伏していた姫路にアキが、

「おはよう、姫路さん」

と、話しかけた。

「よ、吉井君!？」

ずいぶん大袈裟な驚きっぷりだ。本当にアキが隣の席だということに気づいてなかったいようだな。アキのFクラス入りの理由を知っているからか、申し訳なさそうな顔をしている。

「おはようございます、ヒメちゃん」

「え? 夏澄ちゃん、何でここに?」

「全部の教科が無記名だったんだよ」

「あ、日下部君もこのクラスだったんですね」

「俺の得意教科が偏っていることは姫路もよく知ってるだろ?」

「でも、ヒメちゃんとも同じクラスでよかったです」

「はい。夏澄ちゃんや吉井君たちとも同じクラスで安心しました」

「ねえ、もしかして夏澄がFクラスになったのってミナのせいじゃない?」

「どうゆうことだよ」

「夏澄と一緒にのクラスになりたかったから無意識に呪いでもかけちゃったんじゃない?」

「うっ……」

マジでか……否定できねえ……

「でも、嬉しいからいいんです。ありがとう、ミナ君」

「おっ、おう」

「ミナ、顔真っ赤だよ」

「るせえっ。それなら姫路が熱出したのはアキのせいじゃね?」

「え、なんで?」

「姫路と同じクラスになりたかったんだろ？あのままテスト受けてたらアキはAになるか、Bになるか微妙だったからな。同じクラスになるならこれが確実だ」

「そ、そんなこと出来るわけ」

「吉井君、ありがとうございます」

「え？お礼を言われることなんて」

「Fクラスにしてくれましたから」

「そんな、もしそうなら僕のせいで姫路さんが苦しんだんだから」

「嬉しいんです。一緒のクラスになれたから」

「そっか。なら、よかった」

「はいっ！」

（なあ、ピンクのオーラが見えるのは気のせいかな？）

（私にも見えます。ねえ、ミナ君）

（なんだ？）

（応援してあげましょうね）

（ああ、もちろん）

番外編1 俺と夏澄の告白大会

三月 長月中学校卒業式

明久と湊、夏澄も卒業生として出席していた。

『さあ、卒業式のしんみりムードは一旦忘れて毎年恒例の大・大・告白大会を始めますっ!』

『この大会では恋の告白はもちろん、担任や顧問への感謝の気持ち、高校への意気込みなど今までの積もりに積もった思いの丈をぶつけちゃって下さい! さて、司会を勤めさせて頂きますは元放送部3年桜庭と!』

『同じく3年市ヶ谷^{いちがや}です! ちなみに、桜庭は♀で市ヶ谷は♂ですが、とりあえず本編に係わる予定はありませんのであしからず』

『オフレコな裏事情はそこまでにして、さっそく始めましょう! さて、トップバッターは・・・おおっと早速出てきたか【明久君ファインクラブ】! これは3年女子によって結成された同じく3年吉井明久君を陰ながら見守るというものであり、本人すら知らないという全くの非公式クラブです』

『そして推測ではありますが、学校全体の3分の1の生徒が入会しています。これは男子生徒込みです』

そこへ明久が湊に連れられ、2人のいる壇上へと上がって来る。

「ねえ、ミナ。なんで僕が呼ばれるの？」

「はあ？何を・・・」（コイツ、何のことか分かってねえな）

『おおっと、ココでハプニング！吉井君はまったく主旨を理解していません！』

『さて、このハンデをどう埋めるのか！？さあ、ファンクラブの皆様さんどうぞっ！！』

『吉井君（先輩）！！！！』

「は、はい！」

『好きです！！！！』

「えっ、あ、ありがとう？」

『んん？これはOKか？初っ端から成功か！？』

「友達でも嬉しいよ、ありがとう」

「・・・なんでそんな答えになるんだ？」

「だって話したことない子もいるし。これを恋の告白だと思うなんて自意識過剰でしょ？」

『やはり、無理だったかあゝ！ハンデは埋まらず！』

『では、皆さん席へとお戻り下さい』

『・・・随分アツサリですね、桜庭さん』

『後が押しますから』

このあとも、告白などが続く。湊や夏澄も告白されたが、断った。

『さて、次で最後の挑戦者です。その前をとばしたのは私たちのせいではなく、アホな作者の頭が足りないせいですので、文句は作者までお願いします』

『ええーっとだんだん桜庭さんが黒くなってきましたのでサクサク進めます。大トリは………おおっとようやく出てきたか、3年日下部湊君っ！お相手はもちろんこの方！』

湊と夏澄が壇上へ上がる。

『この2人がまだお付き合いをしていない事のほうがビックリですが、日下部君お願いします』

「いろいろ余計だ。……夏澄。俺の言いたいこと分かってると思うけど聞いてくれるか？」

「は、はいっ！」

「なあ、マイク貸してくれ」

「はい、どうぞ。どうせならバックに音楽も流すか？」

「市ヶ谷……楽しんでるだろ。いらねえよ」

そう言うと、深呼吸をしてマイクを口元へ持っていった。

『俺、日下部湊は東風谷夏澄のことが好きだあああああ！！！！！！！！！！』

『おおっと!! なんとも情熱的な告白だ!』

『はたして、東風谷さんの答えは?』

『私も・・・私も日下部湊君が好きっ、大好きです!!!』

『・・・・・・あ、カ、カップル成立おめでとうございます!』

『これにて告白大会を終了します。最後なんで告白しますけど俺、桜庭さんが好きなんですよね』

『へえ、そうなんで・・・す・・・か?・・・え?』

『はーい、帰った、帰った。いつまでも居座らないでくださいよ』

『ちよっと、市ヶ谷君!?』

『なんだよ市ヶ谷の奴、良い所取りしやがって』

『もう、いいじゃん。それより、おめでどう』

『ありがとう、アキ君』

『ありがとな。それとこれからもヨロシク』

『うん。夏澄に変な虫がつかないように頑張ってね』

『分かってるよ』

第5問

その後騒がしくし過ぎたのか先生に注意されてしまった。

それはそれで仕方ないのだがその直後、教室内が静まり返った。ポンポンと叩いただけで教卓が崩れ落ち、ゴミ屑となったのだ。

「え・・・・・・・・替えを用意してきます。少し待っていてください」

先生が気まずそうに出て行った。・・・・・・・・こりゃ本気で考えないと・・・・・・・・

「・・・・・・・・雄二、ミナ。ちょっといい？」

「アキ？どうした」

「話があるんだ」

「別に構わんが」

「じゃあ廊下にでも行くか」

一瞬だけアキが姫路を見たのが分かった。ああ、そういう事か。やっぱり考えることは同じだな。

「んで、話って？」

「僕からの提案。折角2年生になったんだし、『試召戦争』をやってみない？」

「戦争、だど？」

「なんだ、先越されたか。Aクラスに仕掛けるんだろう？」

「うん、そうだよ」

「Aクラスに？・・・・・・・・姫路と東風谷のためか？」

「えっ、ちっ・・・・・・・・ちが「当たり前だろ、なに言ってるんだ。アキも、否定するな。相手への気持ちも否定することになる」・・・・・・・・

姫路さんと夏澄はAクラスにいるべきなんだ」

本当ならあんなバカ共に埋もれてる様な人間じゃない。もしも俺たちのせいでこのクラスになったのなら俺たちの手でAクラスへと連れて行くのが妥当ってもんだろ。

「まあ、いい。俺自身同じことをやろうと思っていたからな」

「え、どうして？」

「世の中学力が全てじゃないって、そんな証明を試みたくな」

なるほど、雄二らしい理由だ。

「代表がそんなこと言うんだから勝てるんだろうな？」

「ああ、作戦は考えてる」

「ねえ、2人とも先生が来たよ」

「じゃあ、戻るか」

先生が戻ってくると、また自己紹介に戻る。これって自分の番が終わるとすつげえ暇になるんだよな。眠くなってきたぜ。

「坂本君、君が自己紹介最後の1人ですよ」

「了解」

雄二が席を立ち、教壇へ向かう。流石にいつものふざけた雰囲気ではない。

「坂本君はFクラスの代表でしたよね」

そう問われ、頷く雄二。言っとくが何の自慢にもなりやしない。なのに、妙に自信有り気に俺らの方を向いた。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ。……さて、皆に1つ聞きたい」

ここで台詞を切り、視線を集める。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが……」

「不満はないか？」

「「「「「大有りじゃあっ!!!!!!!!!!」」」」」

流石は元神童。人を焚きつけるのが上手い。
不満な声が次々とあがる中、雄二は口火を切った。

「俺たちFクラスは、

Aクラスに試召戦争を仕掛けようと思う」

バカテスト3 英語

問題

以下の英文を訳しなさい。

[This is the bookshelf that my grandmother had used regularly]

姫路瑞希&東風谷夏澄の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

「これは

」

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

日下部湊の答え

「これは あります 本棚 それ 私 祖母 持っています 使用
されます 定期的に」

教師のコメント

日本語として意味の通じる文章にしてください。

これだけめちゃくちゃで文章にすらなっていないのに単語の意味は合っているというのがなんとも・・・。

吉井明久の答え

「☆●◆▽＊――（これは私の祖母が愛用していた本棚です。）」

教師のコメント

日本語訳は合っていますので、日本語だけで書いてください。

第6問

雄二がそう言うのと、クラス内が静まり返った。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんと東風谷さんがいたらなにもいらない』

おい……。最後の言った奴誰だ。

『調べてあげよか？』

『あげよか？』

（ん？ああ！頼んでいいか、2人とも）

『任せんさい』

『せんさい』

俺に話しかけてきたのは「貞子さん（仮）」と「花子さん（仮）」。
小学校のトイレにいた姉妹の幽霊だ。仲良くなってから俺を助けてくれるようになった。ちなみに先に喋るのが貞子さん（仮）。あ、もちろん夏澄たちも知ってるぞ？見えはしないがな。

『ミナ、見つけた』

『みつけた』

（サンキュ。早いな、2人とも）

『当たり前だよ』

『だよ』

（後で教えてくれ）

『うん、分かった』

『わかった』

よし、これでいいな。・・・嫉妬深すぎかな、おれって。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

おっ、いつの間にか話が進んでたみたいだ。雄二がそう宣言していた。

『何を馬鹿なことを』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

「根拠ならある。それを今から証明してやる」

ニヒルな笑みを浮かべながら周りを見下ろしている雄二。

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路と東風谷のスカートを覗いていないで前に来い」

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

「っ、土屋君！」

首を振って否定しているが、顔に畳の跡が付いてるからバレバレだ。

（ミナ）

（ああ。一発ずつだ）

後で一発ずつ殴ることに決めた。

「土屋康太。こいつがあ有名な、寡黙なる性職者だ」
ムツリーニ

「・・・・・・・・・・・・・・・・!! (ブンブン)」

土屋康太という名前はそれほど有名じゃない。だがムツツリーニという名なら別だ。男子生徒には畏怖と畏敬を女子生徒には軽蔑を以て挙げられる。

『ムツツリーニだと・・・・・・・・・・?』

『馬鹿な、ヤツがそうだというのか・・・・・・・・・・?』

『だが見ろ。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だ隠そうとしているぞ・・・・・・・・・・』

『ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ・・・・・・・・・・』

(? ということですか?)

(えっ、い、いや姫路さんは知らなくても大丈夫だよ!)

・・・・・・・・アキも大変だな。やっぱり姫路は知らなかったか。

「姫路と東風谷のことは説明する必要もないだろう。皆だってその力はよく知っているはずだ」

「えっ? わ、私ですか?」

「出来る限り頑張りますね」

「ああ。ウチの主戦力だ。期待している」

『そうだ。俺たちには姫路さんと東風谷さんがいるんだった』

『彼女たちならAクラスにも引けをとらないな』

『ああ。彼女たちさえいれば何もいららないな』

(・・・・・・・・貞子さん、誰だ?)

『あそこ』

アイツか。顔を覚えておこう。

「木下秀吉だっている」

『おお・・・！！』

『ああ。アイツ確か、木下優子の・・・』

「当然俺も全力を尽くす」

『確かになんだかやってくれそうな奴だ』

『坂本って小学校の頃は神童とか呼ばれてなかったか？』

『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか』

『実力はAクラスレベルが3人もいるってことだよな！』

あーあ。もうとつくに神童なんかじゃないのにな。言わないけど。

「それに、吉井明久と日下部湊だっている」

・・・シーン・・・

「ちょ、雄二！？なんでココで僕の名前が！？」

「オイオイ、アキはともかく俺まで呼ぶのかよ」

『誰だ？』

『さあ？』

「知らないなら教えてやる。コイツらは《観察処分者》と《ゴースト霊たちの支配者》だ」

『な、何！？』

『・・・なあ、ゴーストコントローラーはともかく観察処分者ってバカの代名詞じゃなかったっけ？』

「ああ、そうだ「坂本君」・・・冗談だ」

「なに言つてやがる。アキはAクラスに勝つための切り札だぜ」
「ああ。観察処分者である明久はフィードバックがある代わりに召喚獣の扱いに慣れてる。しかも成績はBクラスの中でも上位に成る程だ」

『・・・・・・・・本当に勝てるかも』

「ああ、勿論だ。小手調べにDクラスをまず攻めようと思う。誰かにDクラスへの使者になってもらいたいんだが・・・」

「じゃあ、雄二。俺が行く」

「ん？大丈夫か？」

「任せとけ。なにされようが返り討ちにしてやる」

バカテスト4 数学

問題

以下の問いに答えなさい。

『(1) $4 \sin + 3 \cos 3X \parallel 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に存在するXの値を1つ答えなさい。』

(2) $\sin(A+B)$ と等しい式を示すのは次のどれか、?
?の中から選りなさい。

? $\sin A + \cos B$? $\sin A - \cos B$? $\sin A \cos B$? $\sin A \cos B + \cos A \sin B$ 』

姫路瑞希、東風谷夏澄の答え

『(1) $X \parallel \Pi / 6$ 』

(2) ? 』

教師のコメント

そうですね。角度を『 $\circ$ 』ではなく『 Π 』で書いてありますし、完璧です。

土屋康太の答え

『(1) $X \parallel$ およそ3』

教師のコメント

およそをつけて誤魔化したい気持ちもわかりますが、これでは解答に近くても点数はあげられません。

吉井明久の答え

『(1) $X \parallel 6$ 』

教師のコメント

おいしいです。『Ⅱ』を忘れないようにしましょう。

日下部湊の答え

『(2) ?、?、?、?のどれか。どうだ!』

教師のコメント

いや、どうだと言われまして。

第7問

早速Dクラスに宣戦布告に来た。ちなみに俺1人だぞ？アキや夏澄がいるのを知られるわけにはいかないからな。

「なあ、ちょっといいか？」

「なんか用か？」

「Dクラスの代表を呼んでくれないか？Fクラスからの宣戦布告だ」
「何？」

俺がそう言ったとたん、男子数人に囲まれた。まったく、メンドクせえ。

「おい、何の騒ぎだ」

「代表、Fクラスから宣戦布告だって」

「ん？おっ、平賀じゃんか！Dクラスの代表ってお前だったのか！」

「日下部？Fクラスの使者って、お前が？」

「おう。そうだぜ」

「へえ。それにしても無謀な事考えたモンだな。FクラスがDクラスに勝てるんでも？」

「ナメんな。手加減なんかすんじゃんねーぞ」

「当たり前だろ。で、時間は？」

「今日の午後って事で。どうだ？」

「ああ、それでいい」

「じゃあ、あとで」

「じゃあな。弓道じゃ勝てねえけど試召戦争じゃ負けないからな」
「言ってる」

ガラガラ………

「あ、ミナ！お帰り」

「なんだ。無事だったのか」

「簡単にやられてたまるか。それとな、Dクラスの代表が平賀だったんだ」

「弓道部の平賀君ですか？」

「そうそう。平賀源二だ」

やっぱり夏澄とアキを連れていかなくて正解だったな。平賀も2人の成績は知ってるし。

「おい、屋上で話し合いするぞ。サッサと来い」

雄二がそう言うと、教室を出て行ったため俺たちも急いでついていく。アイツは待つってことを知らないのか？

扉を開けて屋上へ出ると、晴れてて気持ちいい。こういうのが小春日和って言うのか？（あ、あれは冬か）

「おい、湊。ちゃんと伝えたな？」

「ああ。今日の午後って言ったぞ」

「なら、先にお昼ご飯ですね。はい、ミナ君の分です」

「サンキュ」

夏澄が俺に弁当をくれる。3人とも料理は出来るから交代で作っている。今日は夏澄の番だ。

「あれ？夏澄、僕の方は！？」

そういえば夏澄が出した弁当は2つ。1つは夏澄のもう1つは俺に渡したからアキのが足りない。

「今日はアキ君の分はありませんよ」

「え！？なんで？」

「私は作ってませんから。だってねえ、ヒメちゃん」

「え？あ、はい。吉井君、これ・・・」

姫路が出したのは女子のより少し大きい弁当。ああ、アキの弁当か。それにしても・・・。

「・・・」

「湊、何故目頭を押さえておるのじゃ？」

「・・・いや、なんでも」

こんなに料理が上達するとは思わなかった。

「そういえば聞きたかったんだけど。坂本、本当に勝てるの？」

「わしも気になっておったぞい」

「・・・（コクコク）」

「大丈夫に決まってる。姫路に、東風谷に、明久がいるんだ。これで勝てないワケがない」

「そ、そうかな？」

「自信もてよ、いけるって！」

「そうですよ！勝ちましょう！！！」

ここからFクラスの伝説が始まる！！なんてな。

設定2

平賀 ひらが 源二 げんじ

所属 2年Dクラス

召喚獣 軽装のプレートメイルにマント。武器はバスタードソード。
部活 弓道部

科目 得意 文系

苦手 理数系

Dクラス代表。湊とは同じ部活なので、親交がある。その関係で明
久や夏澄とも付き合いがある。

番外編に出てきた市ヶ谷は親戚らしい……。

Fクラスとよく絡むというわけではないが、ちよくちよく出る。

ちなみに弓道で一度も湊に勝てたことはない。

「得意科目も俺に勝てないよな（笑）」

「日下部、笑うな!!」

設定2（後書き）

設定はアニメを参考にしてみました。

第8問

「秀吉、戦死なんてすんじゃねえぞ」

「分かっておる。でもものう、わしはおぬしの方が心配なのじゃが・・
・」

「平気だよ。姫路が来るまでは引きつけるから」

たまにはカッコイイとこ見せたいモンだし。

「俺がやっても良いんだけどな」

「仕方あるまい。姫路がやった方が士気は上がるからもう」

「まあな。お、そろそろ行ってくるわ」

「気をつけての」

「せいぜい補習室で会わないようにな」

さて、アイツはドコにいるかな。

なるべく誰にも会わないように道を選ぶ。運が良かったのか、ニアミスしそうになったが真っ正面で鉢合わせになることはなかった。渡り廊下まで来たのだが、

「待ちなさい！豚野郎！！」

この耳障りな声は・・・

「ここは通しません！」

やっぱり清水美春か！？くそっ、ついてねえ。

「いい加減にしろ！！俺を巻き込むな！」

「何がですか！お姉さまに付き纏う豚野郎の分際で！」

「島田には興味ないって言ってるだろうが！！」

「なんですって！？ありません！」

「お前は俺に島田を好きにさせたいのか嫌いにさせたいのかはつきりしろ！！」

「お姉さまは世界一です！」

「意味不明すぎだ！！？」

もうヤダ、疲れる。頭の中どうなってんだ。

「もういいです。あなたを倒してお姉さまを探しにいきます。試獣^サ召喚^{モン}っ！」

「もういいのはコツチだ。………試獣^{サモン}召喚」

まだ戦ってないのに、やる気が失せる。初召喚なのに。

俺の召喚獣は白と濃い青の袴に和弓。向こうは普通の鎧と剣。

「そんな武器で戦えるとも？」

「アホらしい。俺には十分だ」

清水が真っ直ぐ向かってくる。

Dクラス 清水美春 VS Fクラス 日下部湊
化学 94点 VS 17点

「やはりFクラスですね。こんな点数でDクラスに挑もうだなんて」
「だから？」

矢を一本だけ弓に番^{つが}える。それだけでいい。

「・・・終わりだ」

弓を引き、離す。ピンツ、と空気が震える。

Dクラス	清水美春	VS	Fクラス	日下部湊
化学	0点		VS	16点

「なっ、どうして・・・！」

「どれだけ点数差があっても心臓狙えば即死だ。鉄人先生、早く連れてってくれる」

いつの間にか、後ろに居た鉄人に言う。

「西村先生と呼べ！清水、来い！補習だ」

「は、離しなさい！美春はお姉さまを探しに行くのです！！・・・
覚えてなさい！」

ヤダ、メンドくさい。

あゝ、終わったかな。ちょっと見に行こうっと。

あれ？まだ終わってないのか。

「う、ごめんなさいっ」

・・・一振りで勝ったよ。凄いな。

「・・・勝ったんだ」

「みたいだな」

「あれ？ミナ、どこにいたのさ」

「ん、ちよっとな」

なんか姫路がコッチ見てる。

「アキ、姫路のトコ行ってやれよ。姫路もそうしてもらいたがってるみたいだし」

「え、そんなことないと思うけど・・・。うん、行ってくる」

さて、平賀と交渉してサッサと夏澄のトコに戻ろうかな。

バカテスト5 物理

問題

以下の文の（ ）に正しい言葉を入れなさい。

『光は波であって、（ ）である』

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント

よくできました。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

東風谷夏澄の答え

『ミナ君のお兄さん』

教師のコメント

日下部君のお兄さんの名前なのですか？知人の名前がとっさに出て

くるのは分かりますが、これは物理の問題ですので気をつけましょう。

日下部湊の答え

『兄貴ではあるが、女装癖&ロリコン及びシヲタコンの変態。血の繋がりにあることにすら嫌悪感が生じるの』

教師のコメント

そこまで言わなくても。

第9問

Fクラスの勝利により悲鳴やら雄叫びやらが聞こえる中、俺は雄二の元へ向かう。

「雄二！」

「ん？ ああ、湊か」

「悪かったな。俺が平賀の親衛隊を引きつけるはずだったのに」

元々の作戦では俺が攻め込むはずだったんだが、やっぱり清水に手間取ったのがまずかったか。

「お前のフォローは明久がしてくれたからな。それに、お前も役に立ったからな」

「はあ？ 何の話だよ」

俺がした事って清水を倒しただけだぜ？ 清水が重要人物ってならわかるが。

「なんだ、聞こえなかったのか？」

「聞こえる？」

「ああ。あそこまでしてくれたからな。士気が上がったぜ」

雄二が嫌な笑顔で見ている。・・・やな予感がすっげえする。

「お、いたぞ！」

「日下部、お前すごいよ！」

「漢だよ！」

「ホントだよ。まさか・・・」

「「「船越女史を呼び出すなんて!」」」
「・・・・・・・・・・は?」

俺が船越女史（45歳独身）を呼び出した・・・・・・・・だど・・・・・・・・?

「・・・・・・・・どうやって・・・・・・・・?」

「えーと、『日下部湊君が体育館裏で待ってます。生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです』って。須川が」

「須川? へえ須川がねえ。・・・・・・・・今どこにいるかわかるか?」

とりあえず須川、殺ス。

「落ち着け。Dクラスとの話し合いが終わってからにしろ」

「いや・・・・・・・・先に殺らねえと気がすまない」

夏澄に聞かれてないよな・・・・・・・・?

「ちなみに言っておくが、あの放送を指示したのは俺だ」

そう言った雄二の腕を掴んだのは俺、ではなく

「・・・・・・・・きちんと聞かせてもらいましょうか、坂本君?」

黒いオーラを纏った夏澄まわつだった。

「こ、東風谷っ今までどこに・・・・・・・・」

「ええ。須川君とO・H・A・N・A・S・H・Iをちょっと」

顔を引き攣らせる雄二の前で夏澄は携帯を取り出した。なにか操作ををして画面を雄二に見せる。

「・・・電話帳？」

「はい。電話帳の力行のページです」

頭に？を浮かべる雄二の前でまた携帯の操作をする。

「私は今、キ行のページを出しました。これからある人に電話をかけようと思います」

「キ？・・・ま、まさか・・・？」

「坂本君の考えているとおりでしょうね」

「やめてくれ！！」

急に雄二の顔色が悪くなった。弱みを握っているのだろうか。

「ウフフフフ・・・」

思わず見惚れるような微笑みだが、目が笑っていない。余計なことをしないように俺は雄二を夏澄に任せ、さっさと交渉にいくことにした。

「待ってくれ、湊！」

「あら、どこへ行くかというのですか。まだ終わっていませんか？」

「や、やめろ・・・ギャアアアアア！」

「クスクスクス・・・」

うん、気にしない気にしない。

「ミナ？雄二と夏澄は？」

「夏澄が黒カスミンにジョブチェンジした」
ブラック

「？・・・ああ、あの放送。懲りないよね雄二も」

バカテスト6 古典

問題

以下の問題に答えなさい。

『源氏物語の主人公の名前を答えよ』

姫路瑞希、東風谷夏澄、吉井明久の答え

『光源氏』

教師のコメント

正解です。ちなみに「光源氏」は本名ではなく、「光り輝くように美しい源氏の君」を意味する通称です。

日下部湊の答え

『第一部「桐壺」きりつばから第二部「雲隠」くもかくれまでは光源氏を主人公とした物語だが、第三部「匂兵部卿」におうひょうぶきょうから「夢浮橋」ゆめのうきはしまでは光源氏（実際は柏木）と女三宮の子息・薫が主人公となっている』

教師のコメント

日下部君がこんなにも丁寧で詳しく解答していたので驚きました。

須川亮の答え

『幼女を自分好みに育て上げるという大変うらやま・・・けしからん男』

教師のコメント

そこまでピンポイントで答えるなら人物名を答えてもらいたかったです。

第10問

「さて、待たせたな。平賀君？」

「姫路さんに吉井までいるとはな・・・」

「だから言ったろ？『手加減なんてすんじゃねーぞ？』って」

「たしかに言ってたけど・・・。まあFクラスを甘く見た俺達の負けだな。だが、こんな時間だ。作業は明日でいいか？」

「あ、必要ないぞ。Dクラスを奪う気はないから」

俺は平賀と親しいから交渉役をするために雄二に聞かされていたが、聞かされていないFクラスの連中がざわつきだす。

「いいの？あんなこと言って」

「大丈夫だ、雄二が言い出したんだから。俺達の目的はAクラスだぜ？こんなところで満足してたまるか」

「・・・日下部、本当か？」

「条件はあるがな。雄二・・・Fクラスの代表が指示したらBクラスの室外機を動かなくしろ」

「そんなことでいいのか？ありがたく飲ませてもらうが」

もう1つの条件は俺の個人的なものだ。

「平賀は代表だからな。もう一個やってもらうぞ」

「分かった。何をすればいい？」

「弓道場の掃除三ヶ月。俺の分変われ」

「ゲッ・・・マジか？」

「マジ。タイミングについては後日だ。もう帰っていいぞ」

「ああ。じゃ、Aクラスに勝てるのを祈ってるよ」

「嘘付け」

「ハハハ、さすがにAクラスには勝てるとは思わないさ」

平賀と別れ、俺とアキは教室へ向かう。

「ミナ、弓道場の掃除って自分が面倒だったただけだろ？」

「戦犯扱いされるよりマシじゃねーの？」

教室に戻ると、そこには

「あ、お帰りなさい。終わったんですね」

ニコニコと笑顔で自分の席に座る夏澄と、

「も・・・戻った・・・か（ガク）」

ぼろぼろで倒れている雄二がいた。

「夏澄、雄二に何したの？」

「えーと、女の子の秘密です」

つつこんだら負けな気がする。

「雄二、起きなよ。僕達帰るよ？」

アキが雄二を起こそうと揺すっていると、姫路が入ってきた。

「あれ？姫路さん、帰ってなかったの？」

「あ、はい。ちょっと用事があつて・・・」

「ヒメちゃん、終わったのなら一緒に帰りませんか？」

「えっと、ごめんなさい。まだなんです・・・」

「そうですか、残念です」

「じゃあ俺達帰るけど。あんまり遅くまで残るなよ」

「じゃあね、姫路さん」

姫路を残し、俺達は教室を出た。もちろん雄二を引きずつて。・・・
ホント何したんだ？

バカテスト7 化学

問題

『ベンゼンの化学式を書きなさい』

姫路瑞希、東風谷夏澄、吉井明久の答え

『C6H6』

教師のコメント

簡単でしたかね。

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント

君は化学をなめていませんか。

日下部湊の答え

『B—E—N—T—E—N』

教師のコメント

あとで土屋君と一緒に職員室に来るように。それとローマ字を覚え直してください。それだと「ベンゼン」ではなく「ベンテン」と読めます。

鉄人のコメント

小学校の内容からキッチリ鍛えなおしてやろう。

第11問

教室を出た俺達は下駄箱に気絶したままの雄二を放置して帰り道を歩いていた（ちゃんと邪魔にならないように隅によせといたぞ）。半分ぐらいまで来たところでアキが突然、

「あっ！！」

と叫んだ。

「うおっ！な、なんだよ」

「び、びっくりしました・・・」

「ゴメン、忘れ物したみたいなんだ。先に帰っててくれていいよ」

「それぐらいなら待つぜ？」

「ううん、大丈夫だから。じゃあね！」

そう言うのとサッサと走って行ってしまった。

「どうしたんだ？アキのやつ」

「さあ？」

翌日何故か落ち込んでいるアキがいた。昨日学校に戻ったときに何かあったのか？

「・・・・・・・・・・はあ」

「おい、どうした？なんかあったのか？」

「えっ、どうして」

「溜息出てますよ？私達にできることはありませんか？」

「大丈夫だよ。僕の問題だから。ほら、2人とも置いてっちゃうよ」

アキは明るく振舞うが、少し無理をしてるのが俺達にはわかった。

「・・・絶対話してくれませんね。あの様子だと」

「アイツ頑固だからなあ。でも、多分姫路が関係してると思うぞ。とりあえず聞いておいてくれるか？」

「わかりました」

教室に入ると既に姫路がいたため、夏澄が話しかけにいった。俺は教科書を読んでいた雄二のところへ向かう。

「雄二、最後の悪足掻きか」

「ほっとけ。それより何か用か？」

「おう。今日の相手ってどこだっけ？」

「今日はBクラスだ」

Bクラスか。なら言っとかないとな。

「じゃあ気をつけろ。代表は根本恭二だ」

「なにっ！？・・・そうか」

「多分教室を荒らされるぐらいは覚悟しといたほうがいい」

根本恭二といえば『球技大会で相手チームに一服盛った』とか『喧嘩に刃物は当然装備』^{デフォルト}だとか良い評判を全く聞かない。今回も用心に越した事はないだろう。

「なら、ムツツリーニに手配してもらおう」

「了解。俺は席に戻る」

「ああ、助かった」

「なんだよ、気色悪い」

席に戻ると夏澄が近づいてきた。

（ミナ君）

（夏澄、どうだった？）

（とりあえず昨日ココで何をしていたのか聞いてみたんです。そして……）

（そしたら？）

（実はヒメちゃん、ラブレターを書いていたそうなんです）

（……なるほど。それをアキが誰か宛てと勘違いしたのか。見てたらすぐわかるんだけどなあ）

（しょうがないです。アキ君は鈍感ですから）

あの2人を見てるとじれったくてどうにかしてやりたいと思うんだよな。

ちなみに船越女史には1時間目の前にアキの家の近所のお兄さん（39歳独身）を紹介したため万事OKだ。

俺としては一番上のクソ兄貴（バカテスト5を参照）でも紹介してやろうかと思ったけど夏澄とアキに止められたためやめた。

バカテスト8 社会

問題

『G8サミットの「G8」にあたる国名を3つ答えなさい』

姫路瑞希の答え

『日本、アメリカ、イギリス』

日下部湊の答え

『日本、イタリア、ドイツ』

教師のコメント

正解です。他にはロシア連邦、フランス、カナダも含まれます。

坂本雄二の答え

『ガーナ、ギニア、ギリシャ』

教師のコメント

国名がGで始まる国という意味ではありません。

島田美波の答え

『Deutschland, Der U.K., Frankreich
ch』

教師のコメント

『ドイツ』『イギリス』『フランス』

答えは合っていますが日本語で書くようにしましょう。

第12問

「あー・・・・・・・・・ダリィー」

午前中ずっとテストだったからいつもより疲れた（いつも授業中寝てるでしょ！by明久）

「うむ。疲れたのう」

「ほんとよねー」

秀吉と島田が俺の言葉に答える。それよか秀吉の髪型が・・・・ポニーテールって。

「なあ、秀吉」

「なんじゃ？」

「そんな髪型してるからいつまでたっても男扱いされないんじゃないかねの？」

「な・・・・・・・・なんと！」

なんかショックを受けたような顔をしてる。そんなに驚くことか？ただでさえ女顔なのに髪型までそうしたら男だって信じてもらえないに決まってるし。

「ああ、確かにそうだね」

「一度バツサリ切ってみたらいかがです？だんだん暑くなってきましたし」

「そうじゃな・・・・試召戦争が終わったら切ってみるかの」

秀吉の髪を切る宣言を聞いたとたん、クラス中からひそひそと話し

声が聞こえてきた。

「ベリーショートにするのか!？」

「いや、もしかしたらゆるふわカールかもしれないぞ？」

なんでコイツら男の髪型でこんなに盛り上がれるんだ? まあいつか。それよりも腹減った。

「まあいい、食堂行くか!今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」

「見事に炭水化物ばっかだな、オイ」

コイツの腹はブラックホールか。

「あ、食堂行くの? ウチも一緒にいいい?」

「.....(コクコク)」

島田とムツツリーニも食堂に行くようだ。

「秀吉はどうすんだ?」

「わしは弁当を持ってきておる」

「なら俺達と屋上行くか?」

「良いかのう?」

「別にいいけど」

こうして昼飯を食べに二手に分かれた。しばらくして戻ってくると、まだ秀吉の髪型会議が終わっていなかった。・・・ぶっちゃけキモイです。

食堂に行っていた雄二達も戻ると作戦会議を始めた。

「おい、雄二。勝てる作戦はあるのか？」

「ん？ああ、考えてあるさ」

「それが成功して勝ったとしてもその後どうやってAクラスに攻め込むんだよ？」

「そういえばそうね」

「・・・Bクラスと交渉するんだ。設備を交換しない代わりにAクラスに宣戦布告をしろとな」

「そっかあ、Aクラスと戦うだけならCクラスの設備になるだけだもんね」

「そしてそれをネタにAクラスと交渉する。『Bクラス戦の直後に攻め込むぞ』とな」

さすがにAクラスでもそれはキツイか。

「そこで一騎打ちに持っていく。これなら勝機がある」

「一騎打ち？こっちに夏澄と姫路がいるのはわかってんだろ？」

夏澄もDクラス戦に出てたらしい。10人を一気になぎ倒したそう
だ。

「そこも考えてる。大丈夫だ」

「・・・・・・・・そーかい」

そこまで断言するなら信じるしかない。

「というわけだ。残りはBクラスを攻め倒した後で話す。誰かに宣戦布告に行ってもらいたい」

「じゃあ僕が行くよ。昨日はミナが行ったし」

帰ってきたアキの顔に付いてた赤いものは、トマトジュースだと信じたい・・・。

Bクラス戦が始まる寸前、夏澄がなにかしていた。

「おい、なにしてんだ？」

「あ、ミナ君。コレ落としたらいやだから仕舞っておこうと思ったんです」

そう言って外したのは夏澄がいつも付けてるペンダントだった（中にもものを入れるタイプだが、何が入っているのかは教えてもらえない）。

そして、このペンダントが俺を怒らせるきっかけになることは今はまだ知らない。

バカテスト9 英語

問題

『goodおよびbadの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞希、東風谷夏澄、吉井明久の答え

『good — better — best
bad — worse — worst』

教師のコメント

その通りです。

日下部湊の答え

『god — goder — godest』

教師のコメント

good や bad の比較級と最上級は語尾に—er や—estをつけるだけではダメです。それと『o』は2つ付けましょう。それでは『良い』ではなく『神』になってしまいますよ。

土屋康太の答え

『bad — butter — bust』

教師のコメント

『悪い』『乳製品』『おっぱい』

第13問

これからBクラス戦が始まるが、相手は根本だからな。一応用心しておいたほうがいいだろう。

（2人ともいるか？）

『いるよー』

『よー』

（この教室にFクラスの生徒以外が入ってきたら俺に教えてくれるか？）

『分かった』

『わかった』

俺は貞子さん（仮）と花子さん（仮）に見張りを頼んだ。だって試召戦争のルールに幽霊を参加させたらいけないってないもんな？ただこの2人はポルターガイストが使えないから妨害は出来ないんだけどな。

「ミナー、そろそろ行くよー」

おっと、アキが呼んでる。そろそろ行くか。

「姫路さん、大丈夫!？」

「は、はい。だ、大丈夫、です……………」

Bクラスとの戦いが始まった。Fクラスの体力が有り余った野郎共が全力ダッシュでBクラスに向かうが、姫路がついて来れるはずもなく姫路の補佐であるアキとともに走っている。

俺と夏澄が進むと廊下の先で戦っている。

「チッ、数学か。俺じゃ役に立てねえ、夏澄出てくれるか」

「はい。行って来ます」

夏澄が俺の前に出ると雰囲気が変わった。夏澄が前に出ると、男女のペアが挑んできた。

「先生、Bクラスのこりこうや小里浩也と！」

「とやまゆき富山有紀がFクラス東風谷夏澄さんに数学勝負を申し込みます！」

「東風谷夏澄です。参ります」

『サモン試獣召喚！』

お互いが召喚獣を呼び出した。夏澄の召喚獣は白いドレスにトライデント。向こうは日本刀と小型のバトルアックスを持ってるようだ。

Fクラス	東風谷夏澄	VS	Bクラス	小里浩也&富山有紀
数学	482点	VS	155点&162点	

「なっ、腕輪が！！」

「嘘、こんなに！？」

「一気に行きます」

夏澄がそう言うのと腕輪が光り、トライデントの先から水の刃が現れた。

「はあっ！」

一振りすると相手を2人同時に真っ二つになる。

「そんな!!！」

「学年主席ってこんなに強いのか?」

そんな中アキと姫路が入ってきた。

「お、遅れ、ました・・・」

「ミナ、どうなってる?」

「ああ、遅かったな。今夏澄が戦ってるところだ」

「コッチも別のBクラスの人にバッタリ会っちゃってね。姫路さん、戦ったばかりで悪いけど・・・」

「はい、行って、きます・・・」

そのまま姫路がトタトタと効果音が付きそうな歩き方で前に出た。それを見ているアキの顔を見ると・・・。

「・・・アキ」

「ん、なに?」

「顔、にやけてるぞ」

「え、ウソ!？」

そこで戻ってきた夏澄と先へ進もうとするが、

『ミナアア!』

「ん? 貞子さん(仮)?」

「え、いるんですか?」

「ああ」

近くに花子さん（仮）はいないので1人で来たようだ

『教室に誰か入って来た。教室、メチャメチャ』

（そうか、ありがとう。休んでいいぞ）

『うん、分かった』

やりやがったか、あの根本^{クス}。

「アキ、教室戻るぞ！」

「なんで？」

「根本の野郎がなんかしやがったらしい！」

「了解！姫路さん、夏澄、あと頼んでいい？」

「は、はい！」

「ええ、行ってください！」

夏澄と姫路の了承を受け、急いで教室に戻る。すると前を走っていた秀吉に追いついた。

「秀吉！」

「おお、湊に明久か！」

「秀吉も教室に？」

「うむ。代表が根本らしいからの。もしも何かあれば一大事じゃ」

「もう手遅れらしいけどな」

「なに？」

「うわっ……」

「……ひどい有様じゃのう」

「雄二に言っというて正解だったぜ」

卓袱台やシャーペン、消しゴムもボロボロになっていた。

「こりゃ手配しといて良かったな」

雄二がどこからか帰ってきた。

「お前どこ行ってたんだよ」

「協定を結びたいという申し出があつてな。調印の為に教室を空にしていた」

「協定じゃと？」

「ああ、4時までには決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午前9時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する。つてな」

「それ、承諾したの？」

「ああ」

「夏澄と姫路のためか？」

「そうだ」

夏澄だけならいいが、根本が何をするかわからないからな。だが、おかしい。アイツがそんな俺達に有利になる協定を申し込むか？・・・・・・まさか！？

「ムツツリーニ！出て来い！」

「・・・・・・なんだ？」

「Cクラスでおかしな動きはないか？」

「・・・・・・Cクラスが試召戦争を仕掛けようとしているらしい」

「なにっ!？」

「どこど？」

「・・・・・・そこまでは分からない」

「いや、多分Fクラスだ」

「何故分かる」

「Cクラスの代表は小山といってな、根本の彼女らしい」

「……………（ピクツ）」

「あー、待て。根本がどうなろうが知ったこっちゃないがそれは戦争が終わったあとだ」

「そこは止めるのが普通ではないかのう？」

「あのクズにかける情けなどない。とにかくBクラスはCクラスを使ってなにかしてくるだろう」

「そうか……なら一度Cクラスの教室へ行ってみるか？」

「ならアキも一緒にいったほうがいい。襲われたとしてもとりあえずの対処はできるだろう。俺もとりあえずついてく」

「なら今日の戦闘が終わってからだね」

「そうだな。ああ、秀吉は残ってくれ。顔を見られたら少しマズい」
「？分かったのじゃ」

このあとFクラスはBクラスを教室内に押し込むのに成功した。そこっ！書くのサボったとかいわないっ！

そしてさっき話したとおりにCクラスに向かった。だが、

「長谷川先生！Bクラス芳野が召喚を……」

「Fクラス吉井が受けます！試獣召喚！^{サモン}」

Bクラス 芳野孝之 VS Fクラス 吉井明久
数学 161点 VS 170点

「なっ、本当にFクラスか！？」
「もちろん」

アキに殿を任せ、俺達は教室へ急ぐ。さっきいざというときの為に動きは確認していたからあまり焦りはない。

「やはり数学で来たか・・・湊、数学は！」

「出来たらこうやって逃げてねーよ！」

「なら、ウチが行くわ」

「1人では危険です、私も残ります」

「夏澄！？」

「だが、東風谷」

「私はあまり点数を消費してないんです。ミナ君、坂本君とヒメちゃんをお願いします」

「ああ。雄二、姫路行くぞ」

「えっ、でも・・・」

「・・・分かった。任せたぞ」

雄二と姫路を先に行かせ、俺も後からついて行く。

全員が無事に帰ってきたところで明日に持ち越しとなった。
雄二がなにか思いついたようだがいったいなんだろうな？

バカテスト10 保健体育

問題

『女性は（ ）を迎えることで第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める』

姫路瑞希、東風谷夏澄、吉井明久の答え

『初潮』

教師のコメント

正解です。

日下部湊の答え

『初恋』

教師のコメント

CMのキャッチコピーのような解答ですね。

土屋康太の答え

『初潮と呼ばれる、生まれて初めての生理。医学用語では、生理のことを月経、初潮のことを初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が43kgに達するところに初潮をみるものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均12歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会環境、栄養状況などに影響される』

教師のコメント

詳し過ぎです。

第14問

・・・・・・なんじゃこりゃ。

教室内はおかしな雰囲気だ。

「なんじゃ？ おかしな連中じゃのう」

“女子”の制服を着た秀吉が首をかしげた。半分以上おまえのせいだよ！

いくらCクラスに仕掛けるためって言ってもなあ。

「それにしても本当に優子さんにそっくりですね」

「知り合いだったか？」

「そんなに話をしたことはないですけどね」

なんて話をしていると、雄二と秀吉がCクラスへ向かおうとしていたので俺とアキも一緒に行くことにした。

Cクラスの前に来ると雄二が立ち止まった。

「さて、ここからは済まないが1人で頼むぞ、秀吉」

まあ、俺達がついてくわけにはいかんか。Aクラスの使者を名乗ってるもんな。

「気がすすまんのう．．．．．」

「そこを何とか頼む」

「むう．．．．．仕方ないのう．．．．．」

「悪いな。とにかくあいづらを挑発して、Aクラスに敵意を抱くように仕向けてくれ。お前ならできるはずだ」

演劇部のホープだもんなあ。

「秀吉、頑張ってね」

「あまり期待はせんでくれよ．．．．．」

秀吉が1人で向かう。

「大丈夫かな．．．．．」

アキが心配そうに呟く。

「アイツなら大丈夫だろ。伊達に演劇部のホープなんて言われてないし」

「でも心配だな．．．．．」

アキも心配性だよなー。

「シッ。秀吉が教室に入るぞ」

雄二がそう言った為、俺達も口を閉じる。
そして秀吉がCクラスの扉を開けると、

『静かになさい、この薄汚い豚ども!』

開けた瞬間それかよ。

「見事な挑発だね」

「ここまでだといっそ清々しいな」

『な、何よアンタ!』

これは、代表の小山か。今の表情がすぐに想像できるな。

『話しかけないで! 豚臭いわ!』

いや、自分からソコに行ったよな。

それからAクラスの木下（を演じてる秀吉）は小山を挑発しまくった。

「……………なるほど。秀吉目線だと木下優子はああなるのか」
「え、そうなの!？」

秀吉が戻ってくるとBクラス戦の続きを行うために教室へ戻った。

夏澄の様子がおかしい。いつもなら真っ先に戦いにいくのに。今の

夏澄はどこかを見て悔しそうに後ろのほうにいる。

「おい、どっか調子悪いのか？」

「（ピクツ）あつ、ミナ、君・・・・・・・・」

「どうした？」

「い、いえ。なんでもないんです」

チラッとアキの方を見ると、姫路も同じようだ。姫路のところが突破されそうになったがアキが何か先生に言ったように席を外した為、助かった。

「アキ！」

「ミナ？ねえ、姫路さんが・・・」

「分かってる。夏澄も同じことになってる」

「夏澄も!？」

危険な状況になってるのを見た姫路が駆け出そうとするが、急に動きを止めた。

前にいるのはたしか根本のはずだからソコを見る。その手の中には、

夏澄のペンダントとピンクの封筒。

アキも同じようにしてるからあの封筒はきっと姫路のラブレターだろう。

「・・・・・・・・なるほど。やってくれるじゃねーか」

「本当だね。面白いことしてくれるじゃないか、根本君」

「お、お前がそんな皮肉言うなんてな」

「えー。そんなつもりないけど」

そんなことを言いながら俺の方を向く。顔は笑っているが、目はまったく笑っていない。怒ると魔王になるとこ夏澄とソックリだよな。

「姫路さん、具合悪そうだから保健室に行ってきたよ」

「夏澄、姫路に付き添ってくれ」

出来る限り根本への怒りが2人に伝わらないように言った。

「・・・・・・・・はい」

「・・・・・・・・分かりました。ヒメちゃん、行きましょう」

とりあえず前線から遠ざけることは出来た。

「・・・・・・・・さて、これからどうする？」

「そうだね、雄二のところに行ってみようか？」

おもわず呟いた言葉は同じ。

『あの野郎、ブチ殺す』

「雄二っ！」

「おい、いるか？」

「うん？どうした。脱走か？チョコキでシバくぞ」

雄二がノートになにか書きながら言った。今ジョーク言ってる場合じゃないんだが。

「…………雄二。そういうこと言ってる時間ないんだけど（ニツコリ）」

「すまん」

速攻だったな。

「…………で、どうしたんだ？」

「ちよっと話があるんだよ」

「なんだ？」

「根本君が持つてるものがほしいんだ」

「あと夏澄と姫路を戦闘から外してほしい」

「理由は？」

「言えない」

「それを言ったら俺達が頼みにきた意味がねえ」

「…………どうしてもか？」

「ああ」

「頼む、雄二！」

アキが頭を下げたあとに俺も頭を下げる。

雄二はしばらく考えるような素振りを見せたあと言った。

「…………条件がある」

「条件？」

「姫路が担う予定だった役割をお前達がやるんだ。どうやってもいい。必ず成功させろ」

「やってやるさ！」

「俺もやってやるぜ」

無理を言ってるのは分かってんだ。覚悟は出来てる。

「それで、何をしたらいい？」

「タイミングを見計らって根本に攻撃をしかける。科目は何でもいい」

「皆のフォローは？」

「お前ら2人だけだ。Bクラスの出入り口も今のままだ」

「・・・・・・難しいことを言ってくれるね」

Bクラスの入り口から奥にいる根本のところに行くには相当の火力がいるが、たしか今の科目は・・・・現文。

「・・・・・・いける」

『はあ？』

「アキ以外のFクラス全員を下げてくれるか？」

「お前は何を「出来るんだよ。アキを根本のトコまで行かせられる。俺の腕輪ならな」腕輪だと？」

「点数取れてるの？」

「現文ならな」

「お前に賭けるぞ？」

「分かってる。あ、そうだ。ムツツリー二に取ってきてほしいものがあるんだ。面白いことになるぜ」

「全員下がれ！！」

雄二の声が教室に響き渡る。

「なんだ？ギブアップか？負け組代表さんよお」

「はあ？ギブアップするのはそっちだろ？それにお前を倒すのなんて2人だけで十分だ」

雄二がそう言ったと同時に俺が前に出る。

「ココにいる近衛部隊全員に現国勝負を申し付ける！試獣召喚！^{サモン}」

Fクラス 日下部湊 VS Bクラス 近衛部隊×12

現国 437点 VS 平均168点

「なにっ!？」

「400点台だと!？」

「文系なら負ける気はしねえな」

そして俺は矢を一本番え、フィールドの真ん中らへんに撃った。

「ははははは！自信満々に言っというてそれか！」

根本が笑っているがどうとも思わない。

「……………『朽ちろ』」

俺は能力の発動ワードを言った。

「なんだあ？カッコつけたくせに降参か。Fクラスにはお似合いだ
「き、きゃあああああああ！」「な、なんだ！？」

「うわっ、召喚獣が！」

「溶けてるっ！？」

フィールド内にいた敵の召喚獣が崩れていく。

「くくっ、くはははははは！コレが俺の能力だ！さあ、さっさと俺
を倒さねえとそのまま戦死だぜ？まあ、動ければの話だがなあ」

後ろから「えげつない」だの「どっちが敵だか分からない」だの聞
こえてくるが気にしねえ！

そうして根本以外いなくなったところを、

「Fクラス吉井明久がBクラス根本恭二君に現国勝負を申し込みま
す。………チェックメイトだ」

Fクラス 吉井明久 VS Bクラス 根本恭二

現国 362点 VS 210点

アキの召喚獣がロングソードを上から振り下ろす。

俺達のBクラス戦は終わった。

第15問

「…………なぜだろう、Bクラス戦が終わったとたんみんなに避けられた気がする。」

「なんでだ？」

「そりゃあ、ねえ？」

「うむ。無理もないじゃろう。この中の誰よりも悪人らしかったぞ」「マジ!？」

うーん、あの時はあんまり自覚なかったけどそうなのか？

「しかもあんな能力使われちゃあねえ」

「夢に見そうじゃのう」

「……………俺が選んだんじゃねーもん」

なんで俺だけこんな能力なんだよ。……………拗ねるぞ。

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表？」

「……………」

さすがにおとなしいな。さっきとはまるで別人だ。

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

その発言に周囲がざわつきだす。そんな中俺は根本の前に立った。俺は何故か雄二から交渉役に任命されている。その理由を聞いたら

『目つきが1番凶悪だから』。オメーに言われたくねーし！

「ただし条件だ。本当なら弓道場の的にしてやってもいいんだけどなあ」

『的にする』と言うと一瞬ビクツとしたが、力なく

「……………条件はなんだ」

「条件？んー、お前の自己犠牲？」

ワケが分からないというような表情になった。

「お前がAクラスに行って、宣戦布告じゃなくて試召戦争の準備が出来ているとだけ言ってい」

「……………それだけでいいのか？」

「それだけ？ああ、そうだな」

そう言ってムツツリーニから頼んだものを受け取る。

「ただし、コレを来ろ」

それはフリッツフリのメイド服&ネコ耳だった。

「おっ、おい、日下部！それはま、まさか！」

反応したのは弓道部員だった。インパクト強かったもんなー。

「この衣装は、弓道部の現部長・通称ゴリラチャー（ゴリラ＋アーチャー）先輩が今年の新年会のときに着ていたものだ。もちろん洗濯などしていない！」

根本の顔が真っ青になった。まあ、俺だって同じこと言われたらそうなるだろうけどな。

「ば、馬鹿なことを言うな！この俺がそんなふざけたことを・・・」

根本が慌てだした。君に拒否権はないよ？

『Bクラス生徒全員で必ず実行させよう！』

『任せて！必ずやらせるから！』

『それだけで教室を守れるなら、やらない手はないな！』

「よし。決まりだな」

ここまで言われるようなことしたんだから、それなりの罰は受けてもらうぜ。

「くっ！よ、寄るな！変態ぐふう！」

「とりあえず黙らせました」

「おお、サンキュー」

根本の腹に拳を打ち込んだBクラスの男子に礼を言い、アキと一緒に根本の服を剥ぎ取ると女子に着せるのを任せてソコを離れた。剥ぎ取った制服を探るとペンダントと封筒は見つかった。

「この制服どうする？ゴミ箱に捨てちゃおっか」

「いや、焼却炉の方がいいだろ。俺、屋上行くから任せていいか？」

「いいけど・・・そこに夏澄いるの？」

「多分な」

「じゃあ僕、教室にいくね」

「ん。じゃあ後でな」

俺は1人で屋上の扉を開けた。

「・・・・・・・・・・やっぱりココにいたか」

「・・・・・・・・あ、ミナ君・・・・・・・・」

夏澄は扉に背を向けて座り込んだ。振り向いた顔はどこか悲しそうで。

「ずっといたのか？」

「Bクラス戦が終わってから来ました」

「そっか」

なんて会話を交わしながら夏澄の元へ向かい、背後からそっと抱きしめた。

「・・・・・・・・・・え？何を・・・・・・・・」

「夏澄、ちょっと手エ出せ」

「手、ですか？」

おずおずと出した手に根本から取り返したペンダントを置いた。

「嘘・・・・・・・・どうして？」

「どうしてって、お前の大事なモンだろ」

「だって・・・・・・・・もう、戻って、こないって・・・・・・・・思ってた・・・・・・・・か

ら・・・」

「なあ、そんなに大事なもの入ってんのか？たしか小学生のときぐらいから付けてるよな」

夏澄が段々と鼻声になってく中、聞いてみた。教えてもらえとは思ってなかったんだけど、夏澄はペンダントを開いて中身を見せてくれた。

「・・・・・・指輪？」

「はい。そう、ですよ」

中に入ってたのは縁日なんかで売ってるおもちゃの指輪だった。

「ミナ君は覚えてないと思いますけど・・・・・・ミナ君が初めてくれたものなんですよ？」

初めて夏澄にやったって、たしか・・・・・・。

「10年ぐらい前の夏祭り、だっけ？」

「覚えてたんですか？」

「そんなに前のモノをまだ持ってたのかよ」

「貰ってすぐにお母さんに頼んだんです、しまっておけないかって。そうしたらこのペンダントをくれたんです。本当は私が結婚するときに教えなさいって言われてたんですけど、よく考えたらコレをくれた人と結婚するとは限らないんですよ」

「はあ？なに言ってるんだ。するに決まってるだろ」

「え？み、ミナ君？」

「なんだよ。いつか別れるとも思ってたのか？」

俺が夏澄以外の女と付き合うなんてありえないし考えたくもない。

「で、お前はどうかんだよ？」

「・・・・・・・・・・したい・・・・・・・・・・ですよ？」

「ならいいだろ。・・・俺が18歳だったらすぐにでも貰いに行くんだけどなー」

「じゃあ18歳になったら迎えに来てくださいね？それまでずっとミナ君だけ見てますから」

「・・・・・・・・・・」

「？ミナく・・・・・・・・・・え？・・・ふええっ!？」

俺が唇を合わせると、顔を真っ赤にして驚いている。・・・なにこの可愛い生き物。まあ、俺もちよっと恥ずかしいですけどね？ただ、なんか悟ったような気はする。

「さて、教室に戻るか」

「は、はい！」

恥ずかしさを隠しながら言ったが、夏澄はまだ顔が真っ赤だった。

屋上から降りてアキと合流したが、

「あれ？夏澄、顔赤いよ。何してたの？（ニヤニヤ）」

クソ、なんでコイツは他人のことになると鋭くなるんだ!？

そういえば、アキがラブレターを返しに行ったときに姫路は告白しようとしたらしいぞ。言おうとしたら教室に雄二が入って来たから結局言えなかったそうだがな。雄二が少しバツが悪そうな顔してたのは意外だった。

バカテスト11 生物

問題

『人が生きていくうえで必要となる五大栄養素を全て書きなさい』

姫路瑞希、東風谷夏澄、吉井明久の答え

『?脂質 ?炭水化物 ?タンパク質 ?ビタミン ?ミネラル』

教師のコメント

優秀ですね。

日下部湊の答え

『?恋人 ?親友 ?武術 ?好物 ?家族（一番上の兄貴以外）』

教師のコメント

最後のはともかく、この答えは嫌いではありません。

土屋康太の答え

『初潮年齢が10歳未満の時は早発月経という。また、15歳になっても初潮がない時を遅発月経、さらに18歳になっても初潮がない時を原発性無月経といい・・・』』

教師のコメント

保健体育のテストは1時間前に終わりました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0914p/>

俺と2人の文月ライフ

2011年11月12日05時28分発行